



## はじめに

2011年3月11日の大震災から1年が経ちました。

それまでの生活から一転し、何もかも奪われ……失い……どうしたらいいのか……。これからどうやって生きていけばいいのか……。不安と絶望感でいっぱい、涙を流す事しかできなかった日々……。

そんな中、たくさんの方々からいろいろな支援をして頂きました。励ましのメッセージもたくさん、頂きました。感動して涙が止まらなくなりました。私はこの感謝の気持ちを支援して頂いた方々に何とか伝えたいと思っていました。

また、被災地の状況を少しでも感じていただいた方々に、体験した私たちの話しを少しでも聞いていただきたい、という願いがありました。そのような想いから、体験談を集めることにしたのです。

体験談を書いてくださった人たちの中には、家族や親戚、友人を突然、亡くされた方々もい

ます……。誰かに話をするにも口が重く……。

そんな中、皆さんは、話し伝えて欲しい想いや、心の中でストレートに感じたことなどを、心の整理をしながら体験談として書いてくださいました。とても辛かったと思います。でも、心の内をさらけ出すように書いてくださいました。

私はこの体験談を、全国の皆さまの心にお届けします。二度と同じような想いを経験して欲しくないですし、今後の震災に備える為の教訓として、語り継いでいってほしいです。

そして、時代を担う子どもたちへ。この本に掲載する「子供の絵」をお願いしたとき、とても楽しそうにお絵かきしてくれましたね。

沈みきってしまった大人たちの心を元気にしてくれたのは、いつも明るい無邪気なあなた方の笑顔でした。

「このままじゃいけない！」

そう何度も思いました。いつまでも温かく見守っていきます。どうか、これからの未来が子どもたちのためにも素敵な時代になりますように……。

この本の出版にあたり、たくさんの方々の協力がありました。本当に感謝致します。ありがとうございました。

2012年11月 千葉 恵子





No.01 阿部さん

(69歳 / 女川町寺間にて  
被災 / 2012年3月執筆)

3月11日、私はおじいさん(主人)と石巻の方へ出掛けていました。何となく家に帰りたく、女川発1時10分の船で家に帰りました。家でおじいさんとお茶を飲んでいました。そうしたら、すごい揺れで地震があり、長かったので、何かが起きるのではと、慌てて外に出ました。

おじいさんはすぐに船のロープを結び直し、車を移動し始めました。私はこうしてはいられないと家に戻り、リュックに諸々を入れ慌てて外に出ました。

外に出たら「津波が来ている！」と向かいの高台にいた人達が叫んでいました。急いで登って行き、高台に着いた時目にしたのは、家の高さの津波!

両脇の家が「バリバリ、ゴォー」という凄い音で一瞬にしてなくなり、ふと気がついたらおじいさんの姿が見えなく、(えっ~)と頭が真っ白になりました。

ぼーっとしていたら雪が降ってきました。(こうしてはいられない)

とにかく、近所のおばあさん、おばちゃん達と一緒に夢中で山越えをし、女川第2中学校までたどり着きました。

体育館でようやく自分の居場所を見つけましたが、ぼーっと何が何だかわからずにいました。

一夜を明けて朝早く、もしかしたら、おじい

さんがいるかも知れない、と海岸に向け夢中で歩いていました。そうしたら、息子が海岸の方から登って来てばったり。

「おじいさんが見えない」と言ったら  
「泣いている場合か、俺達も死ぬかと思った」と言われ、はっと我に返りました。

昨日から何も食べていませんでした。おにぎりか何か食べ物を求めて近くの家に行き、初対面の60代くらいの女性に「ごはんある?」と聞いたら「あるよ」と言われ、あるだけのご飯で、夢中でおにぎりを作りました。

「あなた、何か食べないと体に悪いよ」

と言われたので、朝ご飯をご馳走になりました。それから再び、おにぎりを作り、皆さんのいる学校まで運びました。

その時は、水も出ず、電気もつかなくて、どうすることも出来ない状態。

「全員で石巻に避難する」

と言われ、ヘリコプターで運ばれ、私と孫は石巻商業高校に行きました。

何時頃かはわかりませんでした。息子が孫2人と来て、末っ子の孫の顔を見て安堵したようでした。

朝になり、4時頃でしょうか、まだ外は暗かったのですが、ここにも何もわからないので、私と息子、孫の3人で外に出ました。万石浦の家は大丈夫、町立病院に働いているお母さんも大丈夫と、安否確認ができ、午後になって孫2人が私を迎えにきてくれました。

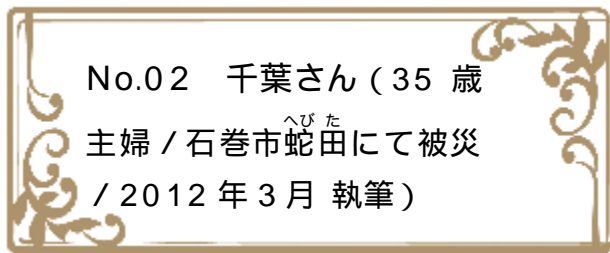
自転車の後ろに乗り、家に着き安堵しましたが、水も出ず、電気もつかない中、とりあえず全員、茶の間に休みました。

おじいさんが亡くなったとは思えません。ど



んな小さいことでもいいから知りたいです。おじいさん早く帰って来て！ と願うばかりです。

私は島の家に住んでいました。でも、家は流され、体一つで逃げてきました。おかげさまで、本当にたくさんの方からの物資に救われました。感謝に堪えません。ありがとうございました。



幼稚園バスから降りてきた長女を車に乗せ、蛇田方面に買物へ向かいました。お店に入り 5 分くらいしてから発生した強く長い揺れを、娘を抱きしめながら耐えました。

天井は波打つように見え、棚からはいろいろな物が落ちてきました。揺れがおさまってから、急いで駐車場へ走り、車に娘と乗り込み、震えの止まらない手でハンドルを握りました。

携帯電話は圏外になっていて、つながりませんでした。家で留守をしている祖母と次女が気になり、信号機の止まってしまった道を  
(落ち着いて、落ち着いて)

と自分に言い聞かせながら進み、家に着きました。

祖母も次女も無事で、主人も仕事へ出掛ける前でしたので家に居ました。妹も居ました。8 人家族のうち 6 人の無事が確認できましたが、両親の安否が分からず、何の情報もないことがとても怖く感じました。

記憶にないのですが、いつの間にか両親が家に居て、これで家族全員の無事が分かりほっとしました。防災無線では、しきりに津波に対する警告が流されていて、私の家では、津波の被害はなく、次の日に、沿岸に住む親戚が来るまでは、どのような被害があったのか全く知りませんでした。

暗くなり始め、電気が使えないので家族みんながろうそくを灯した 1 つの部屋に集まり、子どもたちは

「キャンプみたいだね～」

と騒いでいましたが、この日だけでした。

市の水道は使えませんでした。昔使っていた高木西地区のダムの水が使えたので、煮沸しながら飲み水にしました。

また、ガス釜でご飯を炊き、たくさんのおにぎりを作り、少しでも温かくなっているようにと発砲スチロールの箱へ入れました。

そして、ご近所、親戚、友人などへ届けました。温かいおにぎりを、とても喜んでくれました。毎日、毎日、同じような日が続き、電気が使えるようになったのは、10 日目の夜でした。

初めてテレビで見る見慣れた街は言葉を無くす程でした。道路にあった瓦礫は、車が通れるくらい整備して頂き、お陰で、買い物に出掛けることができました。開いているお店に何時間も並び、買えた物がスナック菓子やアメでもテンションが上がり嬉しかったです。

コンビニでは「とけかけているから」とアイスクリームを無料で配ってくださり、子ども達は本当に喜んでいました。食品を発砲スチロールの箱に入れ、雪を集めその中へ入れて保管し、食料は本当に大切にしました。



3月11日、私は妊娠35週目でした。9日にかかりつけの産婦人科へ行ったばかりで、これからの検診や、出産はどこでできるのかとても不安でした。 2-1

ガレキや放置してある車を見ながら、主人の運転する車で産婦人科へ向かいました。

病院のスタッフの皆さんは無事で、本当に良かった。検診も出産も日本赤十字で対応してくれるからと教えて頂き、ほっとしました。

妊婦検診には、9時に出掛けて何時間も待ち、帰ってくるのが午後2時を過ぎているのは当たり前でした。臨月だった私には大変でしたが、お腹の中の赤ちゃんは順調に育っていました。

そのような状況下で、4月9日22時16分、2874gの元気な男の子を出産できました。

長男は退院してきても、名前がなかなか決まらず、ギリギリで「望夢」(のぞむ)と命名しました。

“どんな時でも希望を持って夢に向かって欲しい、きっと、きっと叶うはずだから”

と願いを込めて。

本当に沢山の方々に助けられ、支えて頂きました。私も何かがしたいと、送って頂いた支援物資を持ち寄り、数人のお母さん達と5月から配布会を開きました。

また、移動手段のないお母さん達には配達し、少しでも自宅避難をしているお母さん達の役に立ちたいと、頑張りました。

あの日から時は経ちますが、当時、5歳だった長女は4月から小学生になります。1歳だった次女は、とてもおしゃべりになりました。4月に生まれた長男はスクスクと育っています。

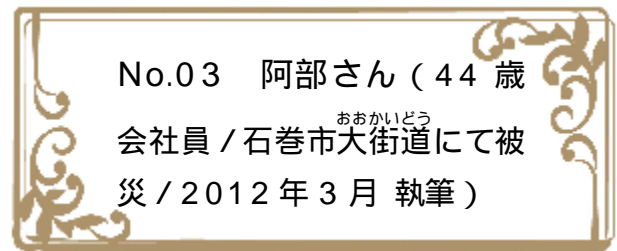


子どもがいてくれるので、辛かったことも、不自由だったことも、いつの日か、笑って話せるようになるのかなと.....。

最後に、本当に数えきれないほどの皆さんに助けられ、支えて頂きました。日本の皆さん、海外の皆さん、本当に、本当に、ありがとうございました。

#### 《補 足》

2-1：妊婦が災害に遭遇したときの対処法については、特集編「災害時の妊産婦マニュアル」を参照して下さい。



3月11日のあの日、わたしは音響会社で部品組み立ての仕事をしていました。突然の大きな地震に、今までに無い恐怖を感じました。間もなく大津波が来ると放送が流れました。私は子どもたちのことが心配で、会社の同僚でもある主人の従妹に

「一緒に家の近くまで乗せて行って」

とお願ひし、二人で会社を出ました。私は途中で車を降り、彼女は幼稚園へ子どもを迎えに行きました。私は、家まで走って帰りました。

家に着いた時、大学生の息子が割れた食器を片付けていました。その日が休日だった主人は、自転車で小学6年生の娘を学校へ迎えに行ったとのことでした。逃げようと食べ物をバックに入れていた時に、すごい地鳴りと悲鳴のよう



な「逃げてー」「早く逃げてー」と叫ぶ女性の声を聞き、すぐに飼っていたうさぎをジャンパーの中に入れて玄関から出ましたが、もう水は庭先まで来ていました。

すぐ後ろにあるマンションに、息子と2人で水の中を走って逃げましたが、マンションの階段から見た我が家は、もう1階の半分近くまで水没し、車も駐車場から2台共流されて行くのを、ただ泣きながら見ることしかできませんでした。あっという間に1階の出窓も見えなくなるくらい、水没した我が家を見ながら、水の勢いの凄さと津波の恐怖で、今、現実にかけていることとは、その時は思えなかったです。

そのころ、主人と娘は、学校の帰りに津波に遭遇し、水に追いかけられながら走ってなんとか歩道橋に上がったとのことでした。雪が降っている外にいるものの、無事だと分かり、ほっとしました。

一晩をそのマンションの階段で20人くらいの人たちと過ごしました。次の日の朝、レスキューの方にボードで救助され、青葉中学校の体育館に息子や近所の人たちと避難しました。偶然、娘と主人も水の中を歩いて青葉中に来たので、再会した時は、娘を抱いて2人で泣きました。それから長い避難生活が始まったのです。

震災から数日後、同僚でもある従妹に、幼稚園児の息子が彼女の家の瓦礫がれきの中から遺体で発見されたと知らせが来ました。私は今でも、わざわざ歩いて訃報を知らせに来てくれた人に、彼女が泣きながらお礼を言っていたときのことを鮮明に思い出します。

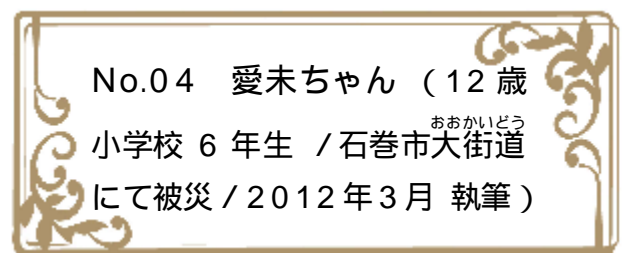
彼女のことは、今でも思い出しては辛く、涙が出てきます。一生忘れることなく、生きてい

こうと思います。

彼女の娘は、私の娘と同年で仲の良い友だちです。とても元気に明るく育っている彼女の娘を、これからも自分の娘の成長と合わせて、見守っていきたいと思っています。

長い避難生活を終え、家はなんとか住めるように直りました。ボランティアの方々に何度かお手伝いを頂き、やっと今、自宅で生活できるようになったのです。

そして、自衛隊の方々、支援物資を提供してくれた皆さまに、とても感謝しております。本当にありがとうございました。まだまだ先は長いですが、頑張っていこうと思います。



3月11日の大地震、津波は誰も忘れることはありません。あの時、私は釜かま小学校で授業を受けていました。突然、今まで感じたことのない揺れが起こりました。

児童全員が体育館に避難したところ、お父さんが迎えに来てくれました。そして、自宅に向かいました。途中、知らないおじさんに呼び止められ

「津波が来たから逃げろ」

と言われました。すると、おじさんの向こうから黒い大きな影と10トントラックが迫って来るのが見え、近くの歩道橋へ上がりました。寒さと足に近づく波の恐怖でいっぱいでした。

その後、隣の会社の2階に入れてもらえまし



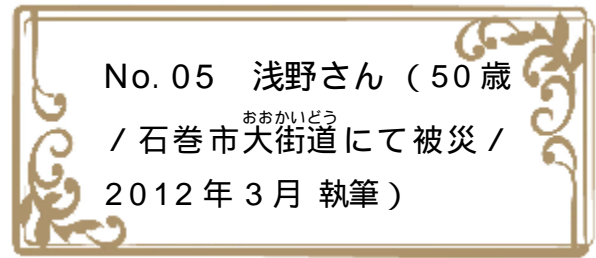
たが、歩道橋にはたくさんの方がいたので部屋がいっぱいになりました。その部屋でひと晩過ごしました。3月12日も水位は変わりませんでした。水の中を歩いて自宅へ向かいました。

何も見えない茶色の水でした。夢中だったので冷たさはあまり感じませんでした。変わって果てた街の残酷な風景に驚くばかりでした。途中、消防士の方にこの先は水位が人の背丈を越えているということで、水没しなかった道路までボートで乗せていってもらいました。

その道路を通り、家の近くまで行きましたが1階がほぼ水没していました。お母さんとお兄ちゃんは家にいたと聞いていたので恐怖心が強くなりました。危険で行けないため、お父さんと近くの青葉中学校へ向かいました。

中学校には近所の方がいて、家族が救出されて体育館にいと教えてもらったので体育館に行きました。すると、お母さん、お兄ちゃんが飼っていたうさぎを抱きながら座っていました。無事、家族がそろったことで安心して涙が出たのを覚えています。

その後の長い避難生活で、全国の皆さんの支援や自衛隊の方々の活動に助けられました。すごく感謝しています。一日一日を大切に、感謝の気持ちとあの日を忘れずに生活していきたいと思います。



わたしは東日本大震災を、会社の仕事中に迎えることになりました。

(もう少しで3時の休みだなあ)

ひとり思いながらいると、急に「ガタガタガタ……」と音がしたその直後、大きな揺れが始まり、びっくりしてすぐ机の下へもぐりました。揺れが止まるどころか更に大きな揺れが来たので、恐怖を感じながらも階段を降り、やっと外へ避難しました。

その後、すぐにサイレンが鳴り始め、津波警報が出たのです。1回目は6メートル、2回目は10メートルの高さになりました。わたしの家は石巻工業湾に近い所にあり、帰るのは無理でした。そして会社の近くの小学校に仲間5人で向かうことにしたのです。

避難したのは、校舎の3階の廊下です。着いて間もなく津波が来ました。その様子を窓から見ていると、建物にぶつかりながら流れてくるガレキや車がいっぱいでした。校舎を津波が通過している時は、音や揺れがすごかったです。

外は雪が降っていて、寒さと怖さで体が震えていました。それから何分位過ぎてからでしょうか、教室の中から

「どこか燃えている！」

と叫ぶ声がしたので、私も行ってみると、南浜町の方がすごく燃えているのが見えました。後で門脇かどのわき小学校だと知りました。

余震が続く中でわたしたちは、怖い一夜、寒



い一夜、長い一夜を過ごしました。わたしは小学校で3日間避難していました。

空腹だったわたしたちに物資が届いたのは、2日目のお昼でした。食パン4分の1枚を食べ、500mlのペットボトル1本の水を、たぶん何十人かで飲んだと思います。

3日目にやっと炊き出しがあり、みそ汁といちご一個が配られました。みそ汁は体を温めてくれました。

4日目の朝、やっと外の水が引いたのでわたしたちは会社へと向かいました。その時、息子と友だちが探しに来てくれ、そのまま学校を離れました。それからは、叔母の家に3ヶ月間お世話になりました。

津波から一週間目、わたしは家に行ってみました。アパートの1階が家なので、駄目になっていることは分かっていますが、実際に見た時はすごくショックでした。茶の間の窓が無くなり、玄関のドアは「くの字」に曲がっていました。

家の前には流れて来た物置があり、その上に車やガレキが重なっていたのです。水は押入れの上部までできていました。すべてが水に浸かり、流れて無くなっているのも多くありました。

これからどうしたら良いのか、わからなくなりました。それでも、いろいろな方々の温かい心の支援のおかげで今日まで頑張ってくることができました。

幸い、わたしの会社は早くに再起することができました。職を失う事もなく、今は仮設住宅に入り、震災前の生活を取り戻して前向きに歩いていこうと思い、毎日の生活を送っています。

No.06 ミキさん

(36歳 / 石巻市立町<sup>たちまち</sup>にて  
被災 / 2012年3月執筆)

数日前から震度5の地震が続き、義妹から「最近地震多いけど、大きい地震が来る前兆なんだって」

と言う話を聞き、これ以上大きい地震なんて来るのかな、なんて思っていました。

3月11日、13時45分、いつもと同じように娘が幼稚園のバスで帰ってきました。その後、友人と約束をしていたので出かける準備をして家を出ようとした時です。

14時46分、今までの地震とは比べものにならないくらい激しい揺れが起こりました。とても立っていられる状態ではなく

「怖いよ～」

と泣き叫ぶ娘と、何が起きているかわからず呆然としている息子を両腕で抱きかかえながら「大丈夫だよ」と声を掛け、必死に守りました。揺れがおさまりそうになったと思ったらまた強くなり、地震は長い間、続きました。

ようやく揺れがおさまり、他の部屋を確認してみると、冷蔵庫やタンスは倒れ、照明器具も落ちてメチャクチャになっていました。わたしたちがいた部屋だけが落下物などなかったのです。

その後も余震は続き、同じアパートの人達としばらく外にいましたが、雪が降っていてとても寒かったので、近くのビニールハウスに入りました。その間、わたしは家族と連絡を取ろうと何度も電話を掛けましたが、一切連絡は取れ



ませんでした。

しばらくして近所の人が  
「こんな所で何やってんだ！ 津波来るぞ！  
死にたいのか！」

と言いに来ました。わたしたちには防災無線  
の声も聞こえず、何も持たずに外に出たので情  
報が全くわかりませんでした。

急いで近くの高校に避難する事にして、わた  
しは車から息子用のオムツ等を取り出し、息子  
を抱きかかえ娘の手を引き、皆と一緒に避難し  
ました。その途中、防災無線からあわてた声で  
「もう立町まで水が来ています！」

と言う声が聞こえてきました。

高校に着くと誘導している人がいて、「急い  
で3階以上に避難してください」

と言われました。もうすでにどこの教室もた  
くさんの人であふれ返っていました。とりあえ  
ず避難したものの、わたしたちの住んでいる場  
所は海からだいぶ離れています。まさか、ここ  
まで水は来ないだろう、そう思っていました。

夕方頃になり、誰かが  
「校庭まで水が来た！」

と叫びました。見ると校庭の奥の方からじわ  
りじわりと水が押し寄せて来ていました。しば  
らくして、校庭の反対方向から外を見てみると、  
さっき通って来た道にまるで川のように水が  
流れ、あたり一面水に浸かっていました。

地震で停電になり、真っ暗で寒くて不安な夜  
を過ごしました。ギューギュー詰めの教室で娘  
と息子を抱きかかえ、遠くから聞こえてくるラ  
ジオで

「海岸で100から200の遺体を発見」  
というニュースを聞き、ただ、ただ家族の無

事を祈るばかりでした。一睡もできないまま夜  
が明け、改めて外の変わり果てた風景を見て、  
がくぜんとしました。

お昼頃になり、教室のドアが開き、そこに誰  
かが立っていました。主人でした。仕事でいろ  
いろな現場に行くため、どこにいるのかも、安  
否もわからず心配で心配でたまらなかった主  
人が、わたしたちを探しに来てくれたのです。

地震があった日は会社においてすぐに避難し  
て無事だったそうです。車の中に閉じ込められ  
た人を助け出したり、津波の何波目かに飲み込  
まれそうになったり、大変な経験もしたよう  
です。翌日、明るくなって、腰の辺りまで水に浸  
かりながら、私たちの所まで来てくれたのです。  
無事でよかったと号泣しました。

そして、3月16日に日付が変わった頃です。  
やっと、携帯電話のメールが届きました。仙台  
に住んでいる姉からのメールで、わたしたちの  
地元である雄勝町むがつちょうは一番奥の家だけが無事で、  
そこに家族も避難しているという内容でした。  
無事だったのだと安堵している間に来た次の  
メールでは

「父、妹、姪、甥無事」

と言う内容でした。母と祖母の安否はわから  
ないままです。

同日、子どもたちを主人の実家へ預けて、主  
人の車で雄勝町へ向かいました。途中歩くこと  
も覚悟で向かいましたが、津波で道が無くなっ  
ていて通ることも出来ず、結局その日は雄勝町  
に行くことはできませんでした。

3月17日、避難生活も1週間近くになり、  
息子の体調にも異変が出てきました。嘔吐と下  
痢が止まらず、熱が39度まで出ました。病院





に連れて行くこともできず、「冷えピタ」で冷やしてあげることしかできませんでした。

結局、1週間近くグッタリして寝たきりの状態が続きました。日赤の方が往診に来て、薬を持ってきてくれた時は、涙が出るほどありがたかったです。

3月18日、私の主人と義兄が前回通った所とは違う道を通り、妹たちを迎えに行ってくれました。少しやつれた妹と、姪、甥と皆で抱き合い無事を喜びました。

「お母さんは？」

私の問いかけに妹はただ涙を流すだけでした。

その後、主人から祖母は避難する途中で車ごと津波に飲み込まれたこと、母は一旦避難したものの、近所の足の悪い人のことが心配で戻ってから消息がわからないと言うことを聞きました。

母に何度も何度も電話を掛け、メールを送りました。姪が無事高校に合格したこともメールで母に報告しました。きっと、母はどこかで生きていて連絡が取れないだけなのだ、絶対に無事なはずだ、そんな想いからでした。

わたしたちが住んでいたアパートは床上50センチメートル程浸水し、わたしの車も水没して動かなくなってしまいました。部屋の中は泥だらけで灯油の臭いなどが充満していました。

ほとんどの電化製品やダンスや衣類なども泥まみれで、使えなくなってしまいました。アパートの皆で協力し、畳を運び出して家の中を片付けました。高校には3月28日まで避難生活し、その後は仙台の姉の家に避難し、4月16日にやっと自宅に戻ってくることができま

した。

5月11日、雄勝町で合同慰霊祭があり参列しました。震災後やっと訪れることができました。町全体が壊滅し、どこを通っているのかわからないほどでした。実家のあった場所には違う家の屋根が流されてきていて、ガレキが山のように積み重なっていました。

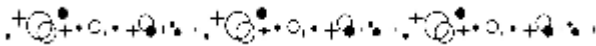
5月27日、実家のあった近くで母らしい遺体が発見されたと連絡が入りました。ポケットに携帯電話が入っていたと、警察の方が写真を見せてくれました。間違いなく母の携帯電話でした。母が自分できれいにデコレーションしていたので、すぐにわかりました。母の死を受け入れなければならなくなり、声を上げて泣き崩れました。

5月29日、母と最後のお別れです。母の姿を見ることも触れることもできませんでした。が、避難生活で大変な中、たくさんの方が母との最後のお別れに来てくださいました。歌と踊りが大好きで、いつも明るく前向きな母でした。

また、震災から一年経った今も祖母は行方不明のままです。他人を気遣う心優しい祖母でした。

もうすぐわたしの娘は小学校に入学します。震災当日、妹は母の着物を着て姪の卒業式に出席していました。そして、その着物を着たまま命から逃がったのです。今では母の唯一の形見となってしまいましたが、今度はわたしがその着物を着て娘の入学式に出席する予定です。きっと、天国で母と祖母も孫の成長を喜んでいくことでしょう。





No.07 齋藤さん (35歳 /  
石巻市<sup>せんごくちょう</sup>千石町にて被災 /  
2012年3月執筆)

今でも自分の行動が正しかったのか、ふと考えてしまいます。3月11日、幼稚園から帰宅した娘(5歳)、次女(1歳10ヶ月)とリビングでDVDを見ながらお菓子を食べようとしていた時です。突然の厳しい揺れ。

「ママ!」という長女の声に  
「こたつにもぐって!」

と指示を出し、次女を抱っこして、何も落ちてきそうもないソファの周りに立ちすくみました。

次の瞬間、テレビが倒れ、オープンレンジも倒れ、食器の割れる音などなど、不気味な音にさすがの次女も泣きわめき、長女がこたつの中から

「ママ、どうなっているの?何が倒れたの?」  
と聞いてきましたが



「いいから、こたつの中に」

と言うしかありませんでした。

一度、揺れが収まってから、玄関を開け、リビングの窓も半分開けて、自分たちの状況を確認しました。何度も揺れるので、長女はこたつの中のまま、次女をおんぶして急いでラジオ付懐中電灯を出しました。

寒く、しかも、割れた物もあったので、靴下を2枚履き、長女にも靴下を渡しました。

その間、主人や実家に電話やメールをしてもつながらず、メールや電話をチェックしながら、荷物をまとめ始めました。

午後3時過ぎ、長女をこたつから出し、自分のリュックに下着と服1枚(着替え用)、マスク、お菓子、お茶など、用意したものを入れさせました。 7-1

わたしは自分の下着と着替え、主人のもの、次女のを旅行カバン2つに詰め込みました。その間も揺れが来る中で手が震えましたが、どこかで冷静だったかも知れません。 7-2

マンションの5階に住んでいたため、長く揺れるタイプの地震には何となく慣れていましたし、ここまで津波は来ないだろうとも思っていました。 7-3

次女をおんぶし、子供のおむつ、お菓子、ジュースの他にちょっとした応急処置のできる物を持って、階段を降り、主人の実家へ車で避難することに決めました。時刻は午後3時30分頃だったと思います。

家の周辺道路は、車の渋滞が無く、スムーズに運転できました。途中、知人がいたので「お互いの家族は大丈夫か」「ラジオを聞いているか」等、少し情報交換をして知人と別れました。



主人の実家へ着いてからは、どういう状況なのかよく分からず、ラジオを聞くしかありませんでした。ただ、その夜は、窓から真っ赤な炎の明かりと煙が見え、時々、プロパンガスのボンベが破裂する「ボン！」という音が聞こえてきました。

次の日に、南浜、<sup>かどのわき</sup>門脇方面が火災で焼け野原になっていたのを日和山から見て、夕べはこれだったのか、と思いました。

主人は13日の午後に会社から戻ってきて家族全員無事だと分かりました。

その後は、子どもたちと毎日のように日和山へ行き、街の様子を見たり、公園の遊具で遊ばせました。それから、食べ物、特にお菓子は1日1個と決め、欲しがる次女をなだめるのは大変でした。

今回の震災を通して、わたしは今でも自分のしたことが正しかったかと疑問に思います。マンション5階にいれば津波は来ないはずなのに、へたに避難して良かったのか？今回はたまたま渋滞もしていなかったのでスムーズに行けましたが、どうなっていたかと思うときりがありません。

そして、子供がいる分、やはり、おむつ用品や日持ちするビスケットなどは、いつも常備しておくべきだと思いました。

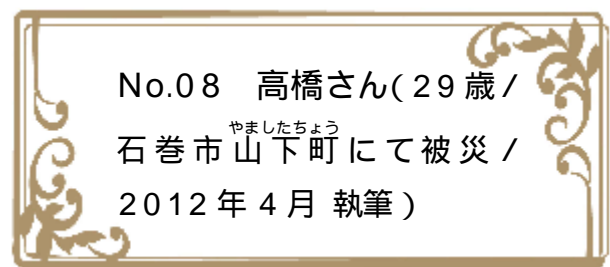
最後に、今回の震災で自分の友人をはじめ全国からたくさんの救援、支援を頂いたことに改めて感謝するとともに、子どもたちには「忘れてはならない経験をした」と、大人になっても思っていてもらいたいです。

## 《補足説明》

7-1：震災前から常備していたものは、電池、数本のお茶や水のペットボトルだけでした。

7-2：「どこかで冷静だったかも」の心境は、子どもを不安にさせないように、冷静になろうと努めましたし、マンションの5階まで津波は来ないだろう、という安心感がありました。

7-3：実際に津波は到達し、建物の下から1メートルくらいまで浸水しました。



わたしは震災当時、石巻の幼稚園に勤めていました。

3月11日、もうすぐ卒園式を控えた石巻の園では、いつものように保育を終えた子どもたちを見送り、職員室でそれぞれ仕事をしていました。わたしは年長児に渡す最終号のクラス便りを作成していました。

午後2時40分、突然の大きな揺れ。食器棚の食器が何枚か割れ、水槽の水が溢れました。教師も急いで園庭に出ました。預かり保育で残っていた子どもたちも園庭に避難してきました。

離れにある預かり園舎は、園舎よりもだいぶ揺れたそうで、子どもたちもおびえていましたが、子どもながらに雰囲気を感じたのが、誰も泣くことなく、じっと様子をうかがっていました。

そのうち、子どもたちを送っていた園のバス



が戻りました。バスの運転中に地震が起き、まだ子どもが何人か残っていたそうですが、何とか全員、保護者に引き渡せたそうです。道路はひどく渋滞しているとのことでした。

そのうち、追い打ちをかけるように雪が降り始めました。本当に冷たく感じました。とりあえず、エンジンをかけた園バスに預かり保育の子どもたちを乗せ、保護者が迎えに来るのを待ちました。

大きなサイレンが鳴り、大津波警報が出ましたが、皆「まさか」という気持ちだったと思います。

園の隣には山に続く坂がありますが、その坂を次々と近所の人が登って行きます。その様子を見て不安が少しずつ大きくなりました。 8-1

いよいよ最後の保護者が迎えに来た時、園の周りが静かに水に囲まれていました。勢いはなかったものの、じわじわと水位が上がってきたのです。ここでやっと「本当に津波が来たのだ」と感じました。

何とか家に帰ろうと園の長靴を借り、家の方に向かってみたものの、長靴ギリギリまで水に浸り、反対方向から来た人に

「これ以上は行けない。あきらめろ」

と言われ、園に戻りました。

園の隣のお寺に泊めていただけることになり、行ってみるとストーブが何台もあり、とても温かかったです。教師の他に近所の方、預かり保育の幼児とその保護者も居ました。 8-2

皆で園のお泊り保育で使う釜で米を炊いたり、パンを分け合ったりして、少しずつ夕食を食べることができました。夜は1枚の毛布に皆で足を入れました。わたしは明日になれば水は

引くと信じて眠りました。 8-3

しかし、次の朝、水は更に増しており、膝くらいになっていました。そこで初めて絶望感を覚え、家族は無事なのか、そればかり考え、涙が出てきました。

携帯電話は本当に使い物になりませんでした。

お昼頃、水がどの辺まで来ているのか探りながら歩いていると、負傷者を運ぶ自衛隊のボートが来て、運良く家の方面まで乗せてもらえることになりました。自衛隊の方は自分達が肩まで水に浸かりながら丁寧に運んで下さいました。

その間に見た光景は忘れられません。いつも通勤に使っている道路が一面の海。店も家も全てが水に浸かっています。2階から助けを求める人もいて、自衛隊の人は「必ず助けに来る」と応じていました。わたしたちは申し訳なくて顔を上げていられませんでした。

車で通れば5分もかからない距離ですが、その時はとても長く感じました。おかげで無事家に着き、家族も皆無事でした。家族は津波が来たことすら知らず、それもまた驚きでした。停電でテレビもつかず、情報不足で何も分からなかったようです。

今ではあの海のような道路もすっかり……とはいきませんが、元に戻りつつあり、園も活気に満ちています。

今回の震災で、「普通に暮らせることがどれだけありがたいか」を学びました。暖かい場所で眠れること、家族と一緒に過ごせることは、決して当たり前のことではないのです。

最後に亡くなった方々のご冥福をお祈り致します。そして、全国からのたくさんのあたた



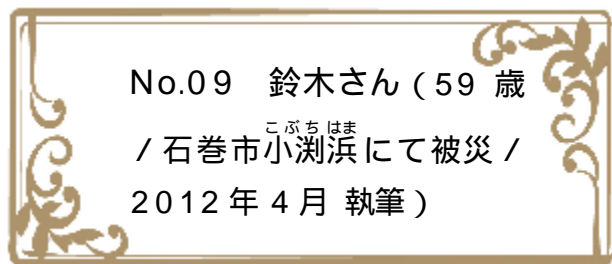
かいご支援、ありがとうございました。

### 《補足説明》

8-1：園に残っていた子どもたちは、いつでも山へ避難できるように、園バスに乗せて待機していました。その後、高台へ避難しました。

8-2：その時の子どもたちの様子は、普段とは違うことを感じていたようでしたが、泣く子はいませんでした。友だちと一緒に泊りできることを喜んでいる子もいました。

8-3：水がどのくらいきているのか、夜中に何度も確認に行きました。



3月11日から1年が過ぎ、まだまだ何も進んでいない気がします。あの時のことは、思い出すたびに涙が出てきます。

わたしはあまり体調が良く無かったので、主人だけで仕事をしていたのですが、2人でないといけない仕事のため、あゆかわ鮎川に同行しました。

帰りに小渕浜で用事があり話していたら「ドン」と地震が起き、乗っていたトラックが上下左右に揺れ、主人が

「ただの地震では無い」と言いました。

屋根瓦は落ち、ガラスが割れ、塀が倒れ、まだ地震が収まらない中、すぐにトラックを走らせ

「シロ(愛犬)が心配だから早く家に帰ろう」

と、わたしは矢継ぎ早に言いました。



道路は地割れが始まり、少し崖崩れもあり、  
わたのは渡波かんえつとうげに向かう関越峠は車の列。ラジオで「石巻港、津波到達まで十数分」との放送。主人が

「これでは途中で津波に遭ってしまう。おながわ女川の裏の道を行こう」

崖崩れの中でしたが、トラックでしたのでUターンして通って行くことができました。

その時、ラジオでは「女川壊滅」と流れて来ました。本当なのかと身震いしました。渡波も渋滞。そこで

「海岸を行こう」

と主人。車は1台も通っていなかったのに、猛スピードで走らせました。とにかく家に帰りたい一心でした。

途中から漁港の道路の2車線に入り、1車線だけ車が重なっていたので、1台も走っていない方の車線を猛スピードで走りました。「津波到達までもう間近」とラジオで言っていました。大橋近くに至り、海を見たら水平線が真っ白一直線でした。

「津波だ！」

とにかく橋の一番高い所に行かなきゃと思いい、進みながら、あともう少しでたどり着けそうになった時、大津波と共にトレーラーと一緒に目の前に上がって来て

「もう終わりだ！」

わたしは大泣きしました。

「真由美！ シロ！」

と叫んでいました。

目の前を家や車が川の方に次から次へ流されてきて

「助けてくれ！」



と叫ぶ声もしました。涙、涙、でした。わたしたちの前に行った 4 台の車は、津波に飲み込まれました。

今度は海の水が灯台の奥の方まで引き、海の底が見えました。主人が

「今度はこれ以上の津波が来るぞ」

すると、右、左から真っ黒な波が襲ってきました。トラックの前の電柱は倒れ、余震、波！橋は大揺れ、体は震え、口もきけず、主人と手をつなぎながら「二人一緒に良かった」と心底思いました。

何から何まで流され、今思うと波に遊ばれている様でした。自然の恐ろしさを、身を持って知りました。

雪は降り、夕方になると寒さが身にしみて、その中、余震、津波「ゴーゴー」、波が引いて「また来るよ」と何回言ったことか。

日が暮れ、光の無い夜になり、今度は火災です。

「ボン、ボン」

と、あちらこちらから火の手が上がり、爆弾が投げ込まれたような光景が一晩中続きました。トラックの燃料も底をつきそうで、寒くてスイッチを入れたり、切ったりしていました。

真っ暗闇で、どんな津波が来ているのか全然分からないのが不気味でした。余震、津波「ゴーゴー」の連続でした。

朝まで命があったことに、感謝で涙がでました。一生懸命生きなさいってご先祖様や皆が守ってくれて、命をもらったと感謝しています。

橋の上には 7、8 台の車が残されただけで、他は全て流されました。映像で見たことはありましたが、それが自分の身に降り掛かるとは思

ってもみませんでした。

朝になると、周りは焼け野原となっており、火と煙が出ていました。また、目の前の橋は陥没して、下には海の水が流れていました。助かったのは、トラックが橋げたにあったからです。潮の引いた時を見計らってトラックで渡り、石巻市立病院へ行き、そこから各自の目標地点に向けて別れました。

私は日和山ひよりやまに向かい、膝まであるヘドロの道無き道を、探りながら歩きました。日和山から見た光景は、まるでテレビ映像で見た原爆が落ちた跡のようでした。

シロがどうしているか心配になり、自宅に向かいました。今度は水が膝まで有り、ここまで津波が来るとは想像もしていなかったのも、その光景にあせんとしました。車の山、ガレキの山、ヘドロの山……。

そこを掻き分け、ヘドロの中を通過して、自宅に着きました。家の中はヘドロでグチャグチャになっており、波が結構来たのが分かりました。シロは 2 階で飼っていましたが、老犬で 18 才からか、余り怯えた様子も無く、普段通りでした。家の中はメチャクチャでしたが、シロの元気な姿を見て安心しました。

今思うと、石巻市内は大変な被害を受けましたが、海岸の方に大手の工場があったため、全滅に至らなかったと思っています。

文面では書き表すことが出来ない、恐怖と心痛。今も女川半島に仕事に行くたび、津波のことを思い出して、気持ちを抑えられなくなり涙が出ます。

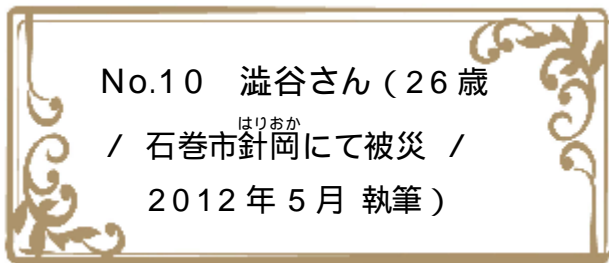
数秒の差で助かった命ですので、これからも一生懸命生きていきます。3 月 11 日は一生、



目に焼き付いて離れないでしょう。



たんの れいに



2011年3月11日。わたしはあの日、海岸から6キロメートルほど離れた親友宅へ内祝いを渡しに行っていました。というのも、2月17日に次女を出産し、里帰り中だったからです。明日か明後日には自宅へ帰ろうと思っていました。長女は2歳半。友人の子供は1歳半でしたので2人を一緒に遊ばせ、私は友人と色々なことを話したり、お菓子を食べたりと、過ごしていました。

次女の授乳中に地震は起きました。

「あっ、地震だ！」

と様子を見ていたのですが、揺れは収まるどころか大きくなるばかり。一緒に家にいた友人の祖父母に

「外に出ろ！」

と叫ばれ、地震の恐怖で私の側に駆け寄って

きた長女と授乳中だった次女の2人を抱え、外へ飛び出しました。

外に出ている、大きく揺れる地面。周りには、瓦が落ちている家々もありました。携帯電話も車のカギも、全部家の中だったので、揺れが落ち着いたところで一旦、家の中へ。

色々な物が倒れ、足の踏み場に困りながらも、携帯電話と車のカギを手に入れ、家に帰れなかったとしても、車の中で過ごそうと考えました。

誰に電話をしても、つながりません。しかし、着信履歴には父の履歴がたくさん残っていました。

そんな中、たまたま外回りの仕事で友人宅前を車で通ったその友人の母。その車のラジオをかけて聞くと、「大津波警報」の言葉。確か、8メートルと言っていた記憶があります。

私の里帰りしている実家は目の前が海。

(これじゃ、帰れない)

このまま友人宅に居よう、と思ったのですが、友人の祖父母やお母さんに、帰れるうちに帰った方がいい、と言われ、パニックになっていたのですが、言われた通りに実家を目指しました。

道中、(海を目指して本当に大丈夫なのだろうか?)と何度も考えました。ただ、誰とも連絡が取れず、判断ができなかったのです。

いつでも車から出られるように、チャイルドシートに子供たちを、ベルトをせずに乗せて、ラジオをかけながら、でこぼこになっている道路を走りました。

途中、わたしの母校である大川小学校の前を通り、マイクロバスが停まっていた、子供達も校庭にいたのを目にしました。いつもなら10分位で帰れる道のり。異様に長く、怖かったで



す。

家の一つ前には集落があり、その避難所でもあるお寺に行こうかとも悩みました。

( だけど、ここに居ても大丈夫か？ )

と、また家を目指して車を走らせました。集落と集落をつなぐ橋が地震の影響で壊れていました。

車で行けず

「車は置いて、歩け！」

と近くにいた男性に言われ、まだ産まれて間もない我が子と、地震の恐怖でおびえている長女を連れ、歩こうとしましたが、長女が抱っこを要求。とても2人を抱いて行ける状況ではなく必死でした。

そうこうしているうちに、橋の陥没している部分に脚立を2つ敷き、その上を通れるようにして貰い、上手く走って、橋を越えました。

家まで行くと、車がダメになると思い近くの山のちょっと高くなっている所へ車を止め、家へ向かおうとした時

「逃げろ！ 津波が来たぞ！」

と大きな声。橋の上から海の様子を見ていた男性が叫び出しました。

ちょうど弟が家に居て、外に出てきてくれたので上の子を頼み、私から離れようとしない長女を抱き、必死で走りました。とにかく走りました。

幸いなことに、実家は高台にありましたので、家まで登り、海の見える後ろを振り返ると、白波第一波。最初は大津波と言っていたけど、こんなものか、と安心しました。

しかし、津波は1回では終わりませんでした。第2波、3波……。何度押し寄せてきたでしょ

うか。その度、波の大きさは大きくなり、そのうち、「ガガガー、ドドーン！」と大きな音をあげ、目の前の集落が次々と流されていくではないですか。その光景は、この世の出来事とは思えないくらいでした。

2階建ての家も見ると「家の中に人はいないのか？」と安否が心配になりました。もちろん、家族の安否も心配。しかし、携帯電話はつながらず、使い物になりません。

雪も降り、本当に悪夢を見ているかのような光景でした。その光景を見てなのか、寒さからなのか長女の全身はガクガクと奮え始め、とてもびっくりしました。落ち着かせるのに必死で、家の中に入り、布団にくるまり、落ち着かせました。

実家へ避難してきた人数は計8人。とりあえず、寒くないようにと、布団にくるまり、石油ストーブをつけ、暖をとりました。食料も飲み物も、何日か生活するくらいはあったので安心しましたが、「何日続くのか、救助は来るのか？」とにかく不安と心配ばかりでした。

とりあえず、飲み水にも洗い水にも使えるということで、外にバケツやボールを出して水を確保。1日目はその雪どけ水を飲んだりして過ごしました。子供たちのオムツにも限りがあったので、家にあったキッチンペーパーを使いオムツ代わりに。

幸い母乳も出ていたので、とにかく(止めないように、止まらないように！)と気持ちを強く持ちました。何度も来る余震におびえながら、眠れない夜を過ごしました。

2日目になっても、何も状況は変わらずにいました。ただ、地元にいる男の人たちが、流さ





れてきた使える船で、遭難した人を海に探しに出て、2人を救助できたそうです。

実家への避難生活中、何度も何度も泣きたくなりましたが、弟もたくさん協力してくれ、娘たちの笑顔に励まされました。

3日目になり、自衛隊のヘリコプターが来てくれました。その日は、様子を見に来ただけのようで、少し上空にいて帰っていきました。

その後、救援物資で食物や飲み物を支援してくれ、あの時のおにぎりや牛乳はとてもおいしく感動するものでした。

橋は完全に陥落していました。

地元にはいた人々が1人、また1人とヘリコプターで救助されていきました。私たち家族は、新生児、小さな子供がいるので、空から吊られての乗り込みは無理です。最後の最後まで地元に残ることになりました。

そのうちに作戦が練られ、少し離れた更地にヘリを降ろしてもらい、その更地まで船で移動。更地からヘリに乗り込み、避難先である飯野川いいのがわ中学校へ行きました。

移動している間、上空から変わり果てた地元を見て、とても具合が悪くなったのを覚えています。ただ、子どもは初めてヘリコプターに乗れ、とても嬉しそう！怖がらず、避難先まで行けました。

避難先に着いてすぐ、中学生の方々が「大変でしたね」「良かったですね」

と声をかけてくれました。その掛けられた声で少し安心して涙が出そうになりました。体育館に行くまでに父も出迎えてくれ、「生きていた」それだけで涙が止まりませんでした。

母や祖母の安否が分からず、父は探しに行く

と言い、わたしと娘は一旦、旦那の実家へ行くことにしました。そこで旦那と再会。旦那は海の側で仕事をしており、ラジオでは「船が漂流」との情報がありましたので、会えた時は本当に安心しました。

そして、3月17日に母、3月19日に祖母に会うことができました。2人とも無事、避難できていたようで、また会うことができ、涙が止まりませんでした。

何日か旦那の実家で過ごし、自宅のあるアパートへ戻りました。アパートには、実両親、祖母、弟が避難しており、狭かったのですが、気持ちを落ち着かせることができました。

水道が使えないので、水をくみに行ったりし、洗濯も手洗い。車も全部流されたので買物も徒歩。3時間並ぶのは当たり前のことでした。

私が震災の時に一緒にいた親友ですが、「きっと逃げた！」と書いていましたが連絡が取れません。何日か経ってから、親友の母から父に電話があり……「ダメだった」と言われました。

その「ダメ」意味が分からず、言葉も出ず、ぼうぜんとしている私に友人の母が「ゆかちゃん(仮名)はいっぱい生きてね。かおり(仮名)の分も長生きして」と伝えられました。涙が止まりませんでした。

(わたしがあの時、あの場所にいたら?)

それを考えると怖いのですが、それよりも、(あの日、わたしが「会おう」なんて言わなければ、友人は自宅におらず助かったのでは?)

その後悔だけがわたしの中に残りました。

1年経った今でも、後悔の念は消えません。まだ実感も湧きません。あの日、「帰りなさい」と言われ、わたしは帰り、わたしだけが助かり



ました。その思いが消えずにいます。

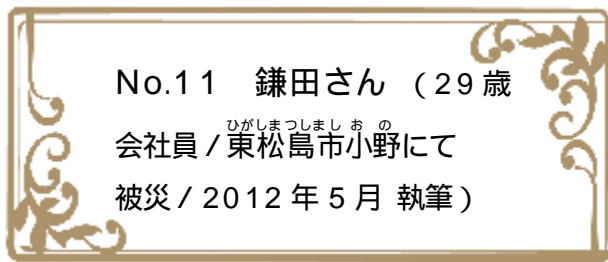
泣いている私を見た長女に

「ママ、大丈夫、ももちゃんがいるからね」

と、何度も励まされました。わたしは子どもたちのために生きよう、そう強く思いました。

実家への避難生活中、何度も何度も泣きたくなりましたが、弟もたくさん協力してくれ、娘たちの笑顔に励まされました。

わたしの地域は支援物資が届く場所ではなかったため、インターネットを通してたくさんの方々に助けて頂いたり、サークルを通してたくさんの方々と触れ合うことができました。全国の皆さまにとっても感謝しています。



間違いだらけの避難。ただ運が良かっただけ……。あの日私はいつも通り会社にいました。大きな揺れで机の下で身動きが取れず、机の足にしがみつくとしかできない状況……。天井からは白い粉がパラパラ、壁はギンギン音を立てていました。

少し揺れが収まった時、急いで玄関を出て、上司から帰宅許可をもらい帰れることに。会社の駐車場で車に乗り込むと友人が駆け寄って来て

「大津波警報だって！」

と教えてくれました。友人の車のラジオからの情報でした。実は車に乗った時、ラジオに切り換えようという考えが全く無く、「とにかく

急いで娘の学校へいくぞ！」それしか頭にありませんでした。友人のひと言が無ければ、いつものまま音楽をかけていたかも知れません。

ラジオを聞きながらとにかく実家へ電話をかけまくりました。なんとかつながった電話で、預けている息子の無事を確認することができました。そして

「学校に娘を迎えに行ってから、そっちに向かうから待っていて」

と伝えました。

父は「分かった」と応じただけでしたので、すぐに逃げる気は無かった様子でした。

自宅より、学校より、遥かに海に近い実家に待機させ、自らも向かおうとしていました……。今思えば絶対にしてはいけない行動。学校へ向かう途中、自宅に寄り、電源ブレーカーを下ろしました。

小学校では「災害時児童引き渡し」というやり方をとっています。校庭に避難させ、保護者が迎えに来たら帰すというやり方です。娘と対面すると直ぐに私の実家へ向かいました。その道中、さすがに海に向かっていることもあり、渋滞に巻き込まれることもなく、すんなり到着することができました。

実家に到着して自分の目で家族の無事を確認。息子は地震が起きた時点で私の母におんぶされていましたが、父は普段通り座椅子に座っていました。特に避難する気が無さそうな2人にしつこく声を掛け、数分後、車に乗り込みました。

ちょうどその時、夫から電話がありました。「地震で道が陥没していつもの道が通れず別の道を行こうとしたが、フェンスに阻まれてい



る。何とかこのフェンスを車で壊して脱出するからそこで待っていて」と言われ待つことに……。またしても、「すぐに逃げずに待機する」という、やってはいけない行動をとってしまいました。

やはり、「大津波警報だから逃げなきゃ」と思う反面、「ここまで来るわけない」という甘い考えがあったのだと思います。十数分後、夫が到着。来る途中、大渋滞していましたが、海に向かうことになる反対車線には車が走っていませんでした。それを利用して逆走したそうです。

夫が車に乗ると今度は父と娘がトイレに行きたいと車を降りました。2人を待っていると通り掛かった若い男性の乗った車が停車し

「津波がそこまで来ている！ オレ達、波に追われて来たから早く逃げろ！」

と言われました。大声で父と娘を呼び、車を出しました。ちょうどその頃、造船所で働く弟からも電話があり

「山の親戚宅に行け！ 自分は、今日は帰れない。他の妹弟にも電話がつながり次第、同じ事を伝えて必ず一緒になれ！」

と言われました。弟が乗っていた船は陸にあったのですが、地震の揺れで海に落ちた状態だったというのは、後で聞いた話です。津波が襲って行く光景も見ていたそうです。

結局、親戚宅まで向かう最中に渋滞にはまることなく走行できました。着いた場所で妹と内陸で仕事をしていたもう1人の弟と合流でき、一旦は親戚宅に身を寄せましたが、迷惑をかけたくないという気持ちから、暗くなってから私達の家に行きました。

電気もないので寝るスペースを確保して横になりました。しかし、何度も強い予震が起こり誰ひとり寝ることはできませんでした。

数時間が過ぎた頃、それまで以上に大きな予震が発生し、市の広報用の無線から

「津波が来ます。逃げて下さい」

という言葉が……。それぞれの車に乗り込み高台へ向かいました。その夜はそのまま車の中で過ごしました。

一晩中、ラジオを聞いていると、弟が乗っているはずの船についての話がありました。「船の中には数十人の作業員が乗ったままのようです」と。

朝になり、明るくなってから、わたし、父、夫、弟の4人で造船所へ向かいました。海側からすごい人数の人達が歩いてきました。みんな造船所で働く人達でした。

中の1人に話し掛けてみると、「船に乗っているのなら大丈夫」とのことでした。多少の安堵感はありましたが、この目で見るとは……。という気持ちがわたしたちにありました。

その後は、警報解除の知らせを聞いていないにも関わらず、父が自宅に帰りたいと言い出し、とりあえず行ってみることにしました。周囲に流れて来た車やゴミ。長靴無しで歩くにはひどすぎるヘドロ。隣の住宅は低い土地だったのか、腰程まで水の跡が壁に残っており、まだ水がありました。

父はいつ息子が戻ってくるかわからないから、母と「2人で家に残りたい」と反対を押し切り残ることに。その間、わたしたち夫婦は開いている店を探したり、友人の安否を確認したりして過ごしました。



夕方、実家から戻ってきた車の運転席には弟の姿が！ 早朝にヘリコプターで救助されて石巻市内の病院のヘリポートに降ろされ、そこから徒歩で親戚の家に寄って仮眠し、自転車で実家まで帰ってきたそうです。何よりも顔を見ることができ、泣く程うれしかったです。

残すは妹が自宅に残してきた息子、わたしにとって甥っ子です。地震後、メールで「高台に避難した」と報告を受けていました。探しに行くのを明朝と決め、その日も布団に入っていると、市の広報無線から「ミルク、オムツが足りません。譲って下さる方は市へ」という内容の放送がありました。明日、明後日には店で買えるという甘い考えから、我が家のミルクとオムツを渡すことにしました。

市役所には、布団にくるまった市民が大勢いました。

3月13日の朝に妹は弟と共に息子を探しに出て、夕方には連れて帰ってくることができました。その後、家は流出してしまったことを知らされました。それでも、妹の義母やその親戚も無事でした。

甥っ子も含め10人での生活が始まりました。数日後に大きな店で買い物もできるようになり、給水車が全国から来てくれました。買い物には現金、給水にはタンクやペットボトルが必要だと身を持って知りました。 11-1

今後何も起こらないとは言えない状況...。最低限、自分で出来る準備と心構えは必要だと思っています。

#### 《補足説明》

11-1：給水車から配給される水の量に厳密



な制限があったわけではありませんが、所持していた容器分は頂けました。



さんじょう あおい

#### No.12 ミユちゃん

(5歳 / 石巻市蛇田にて被災 /  
2012年5月 母代筆)

お店に入って

「今日は何を買うの～？」

とママに聞いていた時、急に大きく揺れ始めました。近くにいたおじさんが

「地震だ！ 大きいぞ！ 窓側から離れろ！」

と大きな声で言いました。

私は、いつまでも大きく揺れていることと、おじさんの大きな声で泣きそうになりました。ママが

「大丈夫だよ、すぐに家に帰ろうね」

と言ってくれました。

揺れなくなったので、外へ出てみました。みんなも外にいました。急いで車に乗りました。

道路には車がぜんぜん走ってなくて、不思議な感じがしました。

家に着くと、茶の間の窓に、パパとトモちゃん(おば)が見えて、また泣きそうになりました。



ピーちゃん（祖祖母）も妹もいました。バケツに水を汲んだり、おにぎりを作ったりとお手伝いをしていたら暗くなり始めました。

おじいさんとおばあさんが帰ってきた時には暗くなっていました。おばあさんは私に「怖かったね～！ 大丈夫だった？」と聞いてきました。私は「ママと一緒にだったから大丈夫」と言いました。

茶の間に火のついたろうそくがあって、とてもキレイでキャンプみたいだ、と思いました。「テレビや好きな DVD が見られなかったり、お風呂に入れなかったり、いつもと同じことがなんでできないのかな？」

「なぜ、好きなハンバーグやホットケーキが食べられないのかな？」

と違ってママに聞くと

「地震や津波があって、お店もいっぱい無くなってしまって、道路も通れないから買物に行けないのだよ」

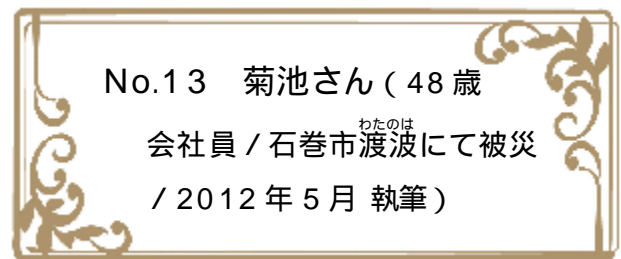
と教えてもらいました。

他にもいろいろお話をしました。私は家族のみんながいつも一緒にいてくれたので、また揺れても少ししか怖くありませんでした。

翌月の 4 月になって、わたしには弟ができました。生まれたばかりの赤ちゃんはとても小さくて、かわいくて、早く抱っこしてみたいなと思いました。

幼稚園も始まりました。年長さんになって、引越してしまうお友達もいて、寂しかったけど、プール遊びやおとまり保育、運動会や遠足、ニコニコ発表会、お餅つきや茶道教室に体育教室……、とてもとても楽しかったです。

卒園式は、ちょっぴり泣いてしまったけど、幼稚園のお友だち、先生がた、幼稚園へ来てくれてたくさん遊んでくれたボランティアのお兄さんたち、お姉さんたち、そして、わたしたちへ色々な物資を届けてくれたみなさん、いっぱい、いっぱい、ありがとう！



3 時過ぎ、会社から帰宅してもいいと言われて、わたしは渡波の家に帰るのにどの道を通って帰ろうか迷いました。

その時、鮎川に津波が来ると放送されていましたが、私には聞こえていませんでした。（日和大橋か、内海橋か、牧山トンネルか）

わたしは内海橋を通ることにしました。信号機は止まっていたのですが、なんとか駅前を通過し、もうすぐ橋だと思ったその時、前の車がバックしたので、わたしもバックして脇道に入った瞬間、目の前に車が「わわん、わわん」と流れてきました。

わたしの車も水に浸かり、エンスト状態になり、流されてきた車がぶつかってきて、だんだんと 3 階建てのビルの裏の駐車場の所に流されて行きました。窓やドアを開けようとしたのですが、開きません。

車の前の方からだんだん水が入って来たので、私は後ろの座席に移動して（どうしよう……）



と思ったその時、急に水が車の中に入って来て、みるみる頭まですっぽり入ってしまいました。

(このままでと死んじゃう！)

(こんな所で死にたくない！)

(どうしたらここから出られるのだ？)

と、頭の中はパニック。

でも

(こんなに水が入ってくるってことは、どこか開いている)

後ろから運転席の窓の方に手を伸ばしたら窓が全開でした。

わたしは必死に泳いで車の上にいる人の所へ行き、その人に車の上に引き上げてもらいました。

「助かった……」

でも、ずぶ濡れで体はガタガタと震え、とても寒かったです。雪は降って来きましたし、目の前は火事。辺りは水、瓦礫<sup>がれき</sup>。とても助けに来てくれる人なんていません。

(この車の上で一晩過ごせるか、どうなるのだろう)

と、ものすごく不安でした。車の上に3時間位。だんだん辺りは暗くなってきました。

その時、3階建てのビルの2階から

「ここまで来られるか」

との声。3台くらい車の上をはいつくばって行き、ビルの前に行きました。

シーツをロープにしてもらいましたが、足場がなく寒さで力が出ません。1回、2回と試みましたが、なかなか登れません。

「無理だ」

と言った時、ものすごい大きな声で怒られ

ました。一緒にいた人が

「肩を使って下さい」

と言ってくれました。わたしはもう一度、登ろうと最後の力を振り絞りました。そして、助かりました。

すぐに着替えをさせてもらい、こたつに寝かせてもらいました。その時の記憶はあまりありませんが、うなり声を上げ、体をものすごく動かしていたそうです。

助けたものの死なれたらどうしようと思ったと、助けてくれたお父さんとお母さんが後で話してくれました。

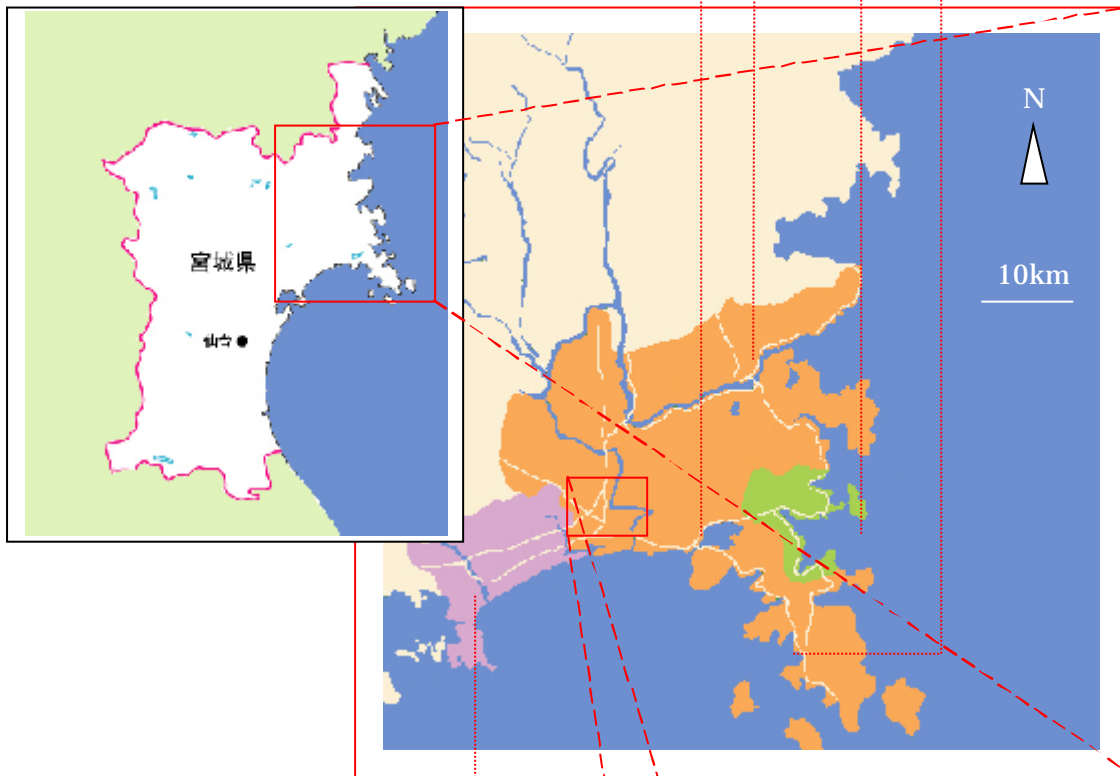
その家に2日間お世話になり、3日目に家に帰りました。



## 被災場所マップ

被災場所となった地名の横に、関係する体験談の番号を添えてあります。

下図に指し示した A～F のポイントは、被災場所のおおよその目安です。ポイントの近辺に該当する地名があります。



**C** ・石巻市渡波 (No.13)

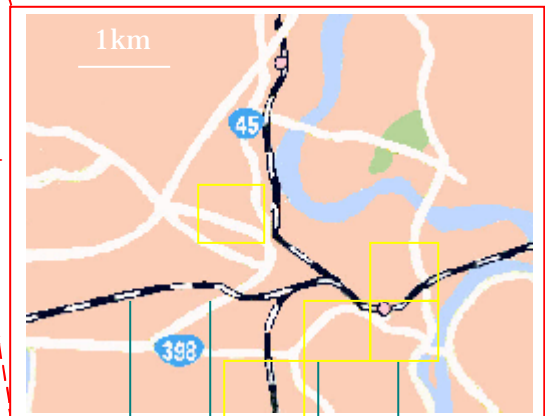
**D** ・石巻市針岡 (No.10)

**E** ・女川町寺間 (No.01)

**F** ・石巻市小湊浜 (No.09)

・東松島市小野 (No.11) **A**

- B**
- 石巻市蛇田 (No.02 / No.12)
  - 石巻市千石町 (No.07)
  - 石巻市山下町 (No.08)
  - 石巻市立町 (No.06)
  - 石巻市大街道 (No.03 / No.04 / No.05)



青葉中/釜小/門脇中/日和山公園